

2023年度 独創的研究助成費 実績報告書

2024年3月29日

報告者	学科名	看護学科	職名	教授	氏名	森永 裕美子
研究課題	高齢者がもつ避難所に対するイメージと避難行動意思との関連					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	森永裕美子	看護学科・教授		公衆衛生看護学	研究統括、データ分析、論文作成
	分担者	山本紗佑里 花谷実歩	保健福祉学研究科 看護学専攻 保健福祉学研究科 看護学専攻			文献検討、データ収集、データ分析、論文作成 データ収集支援、データ分析支援
研究実績の概要	<p>【背景】</p> <p>日本の自然災害の犠牲者は高齢者が多く、高齢者を迅速に避難行動へ導くことは喫緊の課題である。避難行動に関しては、被災時に自宅や避難所での生活のイメージがないこと等が、避難しない意向の影響要因となっている。また、疾患がある者は、体調悪化に不安を抱き、避難先が自分にとって良くない、悪影響があるかもしれないというイメージをもち、避難を躊躇している。どんな健康レベルの人でも、一時的とはいえ避難所で過ごすことや避難所に関してどのようなイメージを持ち合わせているかが明らかになっているとは言えない。避難所に対するイメージがあったとしてもそれが避難行動を起こそうという意思に関連するのかも明らかになっていない。被災を経験した人は、ある程度の方が分かるが、災害経験がなかったり、もともと災害が少なく、その対応意識が低い地域で暮らす高齢者は、危機意識も十分でなく災害の犠牲となる可能性が高いため、イメージが避難行動を妨げるのであれば、何らかの対応が必要となると考えた。</p> <p>【目的】</p> <p>高齢者のもつ避難所に対するイメージと避難行動意思の関連について明らかにすることである。</p> <p>【研究方法】</p> <p>岡山県内の自宅居住の65歳以上の高齢者を対象とした。調査内容は、基本属性(年齢/性別/避難所への避難経験/要介護認定等)14項目、避難所に対するイメージ36項目(他者・専門職との関わり/食事/感染予防/排泄/休息/マナーやプライバシー等)と避難行動意思である。分析は避難所に対するイメージを独立変数、避難行動意思を従属変数とし、項目ごとにロジスティック回帰分析を行った。本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得た(受付番号22-27)。</p>					

<p>研究実績 の概要</p>	<p>【結果と考察】</p> <p>災害時に自治体から避難指示が出された場合、避難所へ避難をしようと思うかの問いに対し、「避難しようと思う 47.9%」「避難しようと思わない 52.1%」という実態が明らかになった。昨今の災害に関するニュース・映像があっても、避難しようと思わない人が5割を超えたことは、そこに自分事と捉えられていないことに加え避難所のイメージも関与している側面があると考えられた。</p> <p>避難所に対するイメージ36項目のうち、他者・専門職からの支援、避難所での安心感、清潔の保持、排泄、休息、食事・水分摂取、健康管理に関すること、避難所運営のあり方を示す内容の33項目に対し、負のイメージをもつことが避難行動意思をもたないことに有意に関連していた。大規模災害を契機に避難所運営ガイドラインは改正され、環境も整備されてきたが、一時でも非日常に置かれることで、自分自身がストレスを感じるのではないかと想像することから避難しない意向に繋がりがやすいと考えられた。避難所環境のさらなる改善を検討しながらも、たとえ負のイメージを持つとも、まず命を守るということを動機づけることに尽力し、避難行動を促進していく必要があると考えられる。</p> <p>【結論】</p> <p>避難所に対して負のイメージをもつことは避難行動意思をもたないことに関連していた。平常時から非日常の中でも命を守ることへの動機付けや避難所のさらなる改善に加え、避難所環境に関する知識の普及や避難所生活体験といった事前教育により、避難所に対する負のイメージを払拭することで避難行動を促進できる可能性が示唆された。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>なし</p>